

Wadi SawawinからJeddahへの道

小村幸二郎

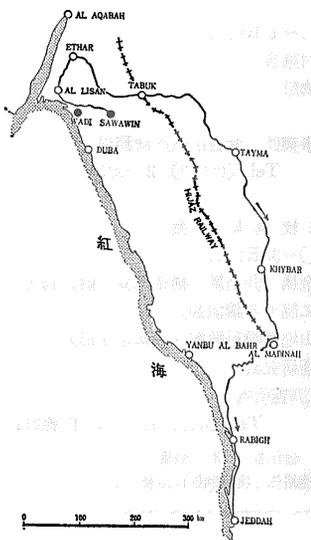
Wadi Sawawin から Ethar へ

3月18日午前5時30分 Wadi Sawawin のキャンプの朝は ベッドから抜け出すのが億劫な程 肌寒い。しかし 今朝は 調査が一段落して Jeddah へ向かって出発する日である故か 全員が威勢よくベッドから飛び出した。澄みきった高原の空気は 冷んやりとして 将に価千金の清涼剤のようだ。調査業務が全部終わってキャンプを完全に撤収する時ならば出発するまでにはかなりの時間を要するのだが 今回は テントも食糧もそのままにして 各自の身廻品や調査資・試料および Jeddah へたどり着くまでの道中での必要な食糧と炊事用具を持てばよいので きわめて身軽だ。午前7時30分に朝食を終わり 8時40分に全車一斉に出発することになった。これからおよそ2カ月間 この奥地で キャンプを見張りながら生活するのは 国王に絶対の忠誠を誓う兵隊であるとともに ガイドでもある男と人夫のアブダラだけだ。

ガイドとして調査隊と同行する連中は ほとんど例外なく射撃の名手であるが その容貌・体格・肌の色などはさまざまだ。そして 敬虔な回教徒である彼等は ほとんど 煙草を吸わないし たくましい忍耐力を備えているが 時には パイプをくわえてイキがるガイドもいる。(第132図)

出発に際して 私たちは 米・野菜などの大部分とタバコの残りを 留守番の2人に与えた。2000ガロン入のタンクローリーには水がたっぷり入っており 突発事故に備えてワゴンを1台残してあるのでほとんど心配はない。キャンプの背後に広がる砂漠を一気に渡り 花崗岩の丘を越えて 一列縦隊に並んだ8台の車は 砂塵を巻き上げながら Jeddah へ向かった(第131図)。キャンプの白いテントはもう見えない。これからおよそ2カ月の間 この奥地に残った2人は どういう生活を送るのだろうか。銃はあり 弾丸もたっぷりあるのでおそらく彼等は 闇夜にはワゴンを走らせて野兎を捕え時には交代で遠出をして 鹿狩りをしながら 新鮮な肉を補給する一方退屈をしのぎつつ 私達が再び此処へ姿を現わす日を待ちつづけるのだろう。残る2人には 別れ際に 遅くとも2カ月後には帰って来るといったけれども Jeddah への往復の途中で突発的重大事故に遭遇しないとは限らないし また Jeddah へ帰り着いて後 予定通りにこのキャンプへの旅行の準備が完了する保障もない。

いかにベドウィン出身のたくましい2人とはいえ 狼やハイエナが徘徊するこの奥地で 長期間にわたって 特に定められた日常業務もなく 単調な生活を送ることは楽ではない。キャンプを出発してからおよそ30分後



第131図 Wadi Sawawin から Jeddah への旅行経路



第132図 パイプをくわえた動物資源局のガイド アフリカ南部からの移住者である

に 灌木が点在する谷間に ベドウィンの黒いテントが見えた。これまでに何度も私達のキャンプに遊びに来たこのキャンプの主は 名残りおしくてか 私達にラクダの乳をしきりにすすめる。レバンと呼ばれるラクダの乳は 泡立ち 結構イケル。ベドウィンの多くは 転々と放浪の生活を送る都合上 一般家庭に常備されている程多数の食器を持っているわけではないのでレバンやハリーブ(羊・山羊の乳)を人にすすめる場合でも 大きな器に入れて差出すことが多い。そして接待される連中はこれを回し飲みするわけだが 時には 自分の番になると 口を離さずに 一気にその半分位を飲んでしまう。こういう意地悪い者が1人でもいると順番を待つ連中の

心中はまことに穏やかではなく どうかすると「お前は余計に飲みすぎる」とか「そんなに飲んでいない」とかお互に牽制しているうちに喧嘩になることもある。

タダ飲みした上に喧嘩までするんだから接待するベドウィンも気苦労が多いというものだ。きわめて人柄の良いベドウィンならば 大体均等に飲めるだけの量を客人に提供することが多いので 欲の深い連中がよくやる口喧嘩はそれを当てこんだ芝居かもしれない。

狭い谷間を通り Wadi al Arnabを一気に走り抜けて11時に Ash Sharmahのオアシスに着いた。ここで10分間休憩し もぎたてのトマトを買って皆で賞味する。日頃新鮮な野菜に恵まれないキャンプ生活を送っていただけに このトマトの味は格別だ(第133図)

Ash Snarmah から小高い丘を越え 紅海の汀に沿って北へ進むと およそ20kmで Al Khuraybah に着く。静かな海岸には珍しく しゃれたボートが浮んではいるが この部落の戸数はわずか40戸ばかりで 日用品を商ううす暗い店が1軒あるだけだ。部落の東に Aynunaのオアシスをもつこの寒村は 古代からイエーメンとシリアの首都ダマスカスを結ぶ街道の要所として位置し 現在もなお ヨルダン・レバノン・シリアなどからサウジアラビアへ通ずる主要経路の一つに面してはいるが そのたたずまいからは古代から現在へ至る長い年月にわたる発展の跡がほとんどみられない。

アラビア半島の北西端部は ここから西方へ大きく張り出して 第2次中東戦争の爆発点となった Tiran 海峡に臨む(第131図)。この付近は海岸に近い故か 塩分と湿気とを含んだ道はまるでアスファルトで補装されたように固まり その両側には塩分で固められた砂が刃物を連ねたように広がっている(第134図)。試しにこ

のがった部分を手で折ろうとしたが力およばず 靴のかがとで折らざるを得なかった。

Al Khuraybah を過ぎて無人の砂漠を北上すると 間もなく 小さなナツメヤシ林と10戸足らずの粗末な家が見える。Lisan と名付けられたこの部落は 一見とるに足りない存在ではあるが 北西サウジアラビアに分布する第三系の堆積ベーズン(Lisan basin)のほぼ中心地として この国で調査研究業務に従事する地質学者の間ではよく知られている。午後1時30分 Ash Sharmah とTabuk との間でもっとも大きな部落である Al Bad に到着した。

道傍には井戸から汲み揚げられた清水が村人や旅人や家畜の喉をうるほす場所が造られており(第135図) 道を距ててその東側にはナツメヤシがうっそうと茂って緑蔭を作っている(第136図)

この村には100戸ばかりの人家と立派な小学校があり 水汲み場の近くには小麦畑があって この村の豊かさが一見して感じられるたたずまいだ(第137図)

この水汲み場で 汗とほこりを流し、一休みしているところに小学校5年生の子供が3人もの珍しげに 近寄ってきた。この子供達をうながして小麦畑の見える所に立った私は 失礼千万なことを十分承知の上で 子供達の農作物に関する知識の程度を知るために 彼等に若干の質問を試みた。

「イシ・ハダ(これは何)?」

「ハダ・ヘンタ(これは小麦です)」

「アンタ・タークル・ハダ(君達はこれを食べる)?」

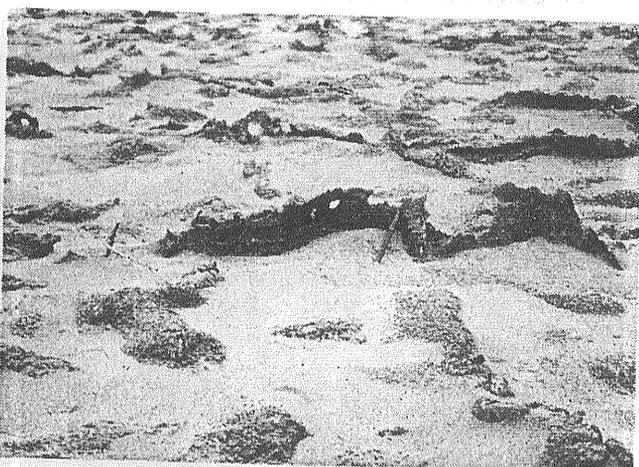
「ラア・マア・アツクル・サウイ・ボーダラ(いいえ食べません 粉を作ります)」

「ボーダラ・パス(粉だけか)?」

「バーデン・サウイ・ホブス(後でパンを作ります)」



第133図 Ash Sharma オアシスのトマト貯蔵所でトマトを買う人夫達 ナツメヤシの葉で囲った この中にトマトを貯蔵し 必要に応じて取り出す



第134図 紅海沿岸でしばしばみられる特異な地表の状況 細粒の砂が塩分で固められ刃物のように鋭い形をしているので危険である

「アブウ・ワア・ウム・ハッガー・サウイ・ハダ・ヘンタ・ワ
ア・ホンマ・ヤークル・ホプス・ラーケン・マア・アンダッ
ク・シヨゴル・ワア・マア・タークル・ホプス・ムシユケダ
(君達のお父さんやお母さんがこの小麦を作るんだから彼等
はパンを食べるけれども 君達は仕事をしないのだからパン
を食べない、 そうじゃないか?)」

「ラア・アブウ・ウム・アホ・オホト・ワア・アナ・アクル・
ホプス、 コンロ・サワサワ (いや 父も母も兄弟も姉妹も
私も食べる、 皆おなじです)」

はじめて見た日本人のたどたどしいアラビア語の質問
に 多少緊張した子供達は やや控えめではあるが は
っきりと返事をした。

その農作物が自分達の生活と直接しているだけに 彼
等はそれが何であるかをよく知っているのだろうが もし
Al Wajh や Jeddah などに住む連中に小麦の穂を見
せても 彼等はそれが何であるかをほとんど知らないだ
ろう。 もっとも こうしたことは日本でも同じだ。

北辺の地にしては割合に豊かなそして人口も多いこの
村がヨルダンの Al Aqabah や Tabuk から紅海沿岸へ
旅する者にとって貴重な休息場となっていることは確か
なのだが それにしては ガソリンスタンドもなく ま
た 道路に面する店もなく 自動車旅行者には少々不便
だ。 私達は この村でガソリンを購入する予定で来た
のだが 以前あったガソリンスタンドはすでに閉されて
おり困ってしまった。 これから Tabuk まで約 300 km
の悪路を走るには持合せのガソリンの量は十分でない。

しかし「捨てる神あれば救う神あり」で 私達がヤシ
の葉蔭で休息している時 緑色のナンバープレートを着
けた農林省のトラックが通りかかった。 強心臓の持主
で口八丁手八丁の通訳は 将に得たりとばかりに その
トラックの運転手に手を上げて車を停めさせ 外交スマ
イルを満面にたたえて挨拶をはじめた。 ガソリン獲得

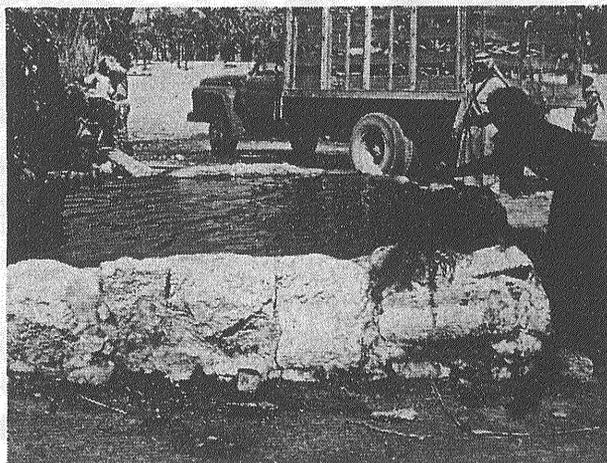


第136図 Al Bad のオアシスに行く女と羊の群

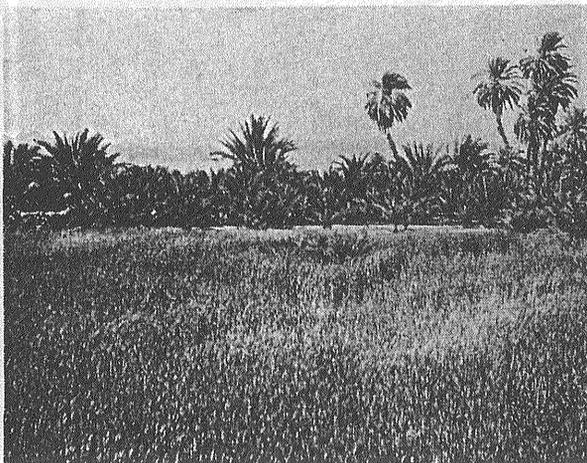
の下心を胸に秘めた通訳の態度は 私達はずかしさを
覚えるほど オーバーで馴れ馴れしく まるで探し求め
ていた親によく巡り逢えた時のようだ。 鉄面皮も
こうまで徹底すれば見上げたもので 何だかんだと息つ
く間もなくしゃべっているうちに 彼は とうとう ガ
ソリン11缶を分けてもらうことに成功した。 これで Ta
buk まではガソリンの心配は無用だ。 往々にしてうる
さくそしてわずらわしさを相手に与えるアラビア人の先
天性の一つとも思える長口説も こういう場合には、そ
の効力を十分に発揮するものらしく 中々貴重だ。

相手の男の気が変わらぬうちに早々とガソリンを獲保
し 水を十分に補給し終えてから昼食の準備にかかった。
旅行中は茶店で昼食をすませることが多いのだが こ
こには茶店もないので 即席のカマドで湯をわかし パン
と魚の缶詰と紅茶とを詰めこむことになった。

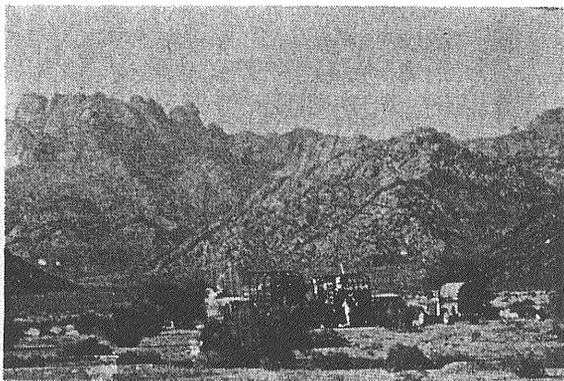
この日のうちに Tabuk へたどり着くことは困難なの
で 人夫達ものんびりしたものだ。 4時30分になっ
てようやく出発準備を整え それから15分後に一斉に出発



第135図 Al Bad の部落にある人工の池 この池で旅人は身を清め
家畜用の水を汲む 池の左手に深さ10mばかりの井戸があり
水はモーターで汲み揚げられて 池に注がれる 一方 飲料



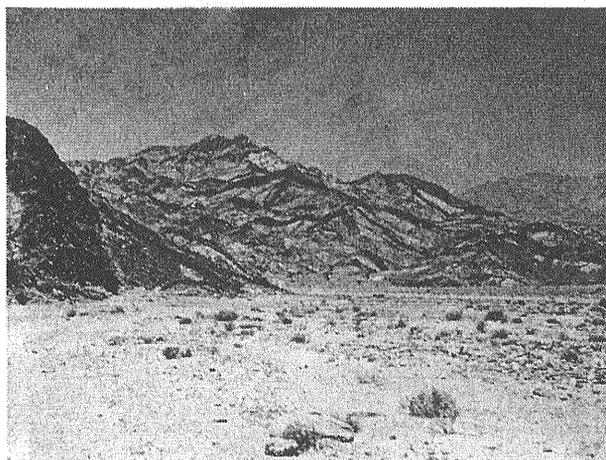
第137図 Al Bad の一角にみられる小麦畑とその囲りに植えられたナ
ツメヤシ



第138図b Ethar 近くの野営地 この付近は山が高く谷間には樹木がやや多いせいか時折野鹿がみられる 手前の黒い部分は砂岩 粘板岩 後方の灰色の部分は花崗岩

した。Al Bad を出発してからおよそ30km 1時間後に 停車しているトラックに出逢った。このトラックは 婦人を混えた10人ばかりの客を乗せて Tabuk から Al Bad へ向う定期便だが パンクで立往生していたのだ。トラックの運転手も乗客も 私達に「チューブを1本ゆずって欲しい」と 必死に懇願した。「予備のチューブを持っていないのか？」と聞くと「持ってない」という。同行の自動車整備士に予備のチューブの有無ともしそれを彼等に譲った場合 Tabuk までの間で困ることがないかどうかを尋ねると「新品の予備チューブがあり われわれの方は大丈夫です」というので Tabuk で新品を買える値段で 手持を1本譲ることにした。これで彼等は 1時間半ばかり後には Al Bad に着ける。

6時28分 道路の分岐点に到着した(第138図) 右へ行けば Tabuk 左へ行けばヨルダンの Al Aqabah である。薄暮につつまれたこの分岐点には トタンブキの小さな炭小屋がぽつんと建っているだけで 人影はな



第138図a Tabuk 道路と Al Aqabah 道路との分岐点 Ethar 付近の風景 先カンブリア時代の花崗岩とこれを貫く無数の岩脈(黒い縺)とからなる 山の間には古い河の跡と一部に河岸段丘とがみられる

い。

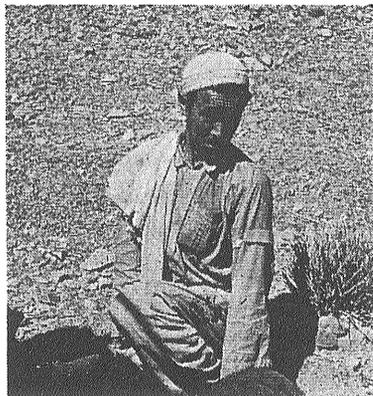
Ethar の夜

もう間もなく陽が暮れるので この分岐点から Tabuk への道を 1km ばかり行った場所で野営をすることになった。小高い丘の麓に広がる砂地が今夜の仮寝の宿だ。「やれやれ 今夜はアカバ湾へ30km Al Aqabah へ80km のヨルダンとの国境近くで野宿をするわけだが できることなら 明朝早くここを発って 左の道を突走り 中東地域で有数の保養地としていられているヨルダンの Al Aqabah の景観を一目でも見たいものだ」と 不可能なことは判っているくせに 考えながら 食事ができるのを待つことにした。ところが 間もなく 人夫達の騒々しい声が耳に入った。「喧嘩でもないらしいが」と思いながら 焚火を囲んでいる連中の所へ行ってみると Al Bad を最初に出発したダヘッラツラ(第139図) 運転のジープが見当たらない。彼等の騒ぎの原因はこの車だ。Al Bad を出発する直前に 運転手達はここで野宿することを申合わせたはずなのに 全く変だ。以前にここを通ったことのある運転手2人と人夫2人が乗っている車なのでよもや道を間違えたわけでもあるまいが こうなったら じたばたせずに 彼等の帰りを待つほかない。

いずれにしても Tabuk への道をより先へ進んだか または 間違えて Al Aqabah の方へでも突走ったのだらう。仮りに Al Aqabah の方へ行ったとしてもここへ戻って来るだけのガソリンは十分にあるので 大して心配はない。夕食を終り 焚火を囲んで雑談をしている時 北の空を人工衛星が横切った。2等星位の明るさでものすごい速さだ。日本では滅多にお目にかかれないが 湿気が少なく そして 快晴の砂漠でキャンプ



第139図 運転手のダヘッラツラ 立派なヒゲを生やし長髪この男の 風ぼうはキリストに似ている



第140図
即興詩に即席のメロディーをつけて唄うことを得意とする人夫のスライマン。垢と陽焼けで赤黒い顔をし、何となく汚い服装をしているくせに、時折アイシャドウをしてイキがっていた。

していると、人工衛星を見る機会は意外に多い。はじめ人工衛星を見た時にはいささか感動したが、この頃では「あまたか」と思う程度で、別に珍しくもない。

Al wajh 地域でキャンプをしていた頃、人工衛星が飛んでいることを知っている人夫達の中でも、それが飛んでいるのを見た者はいなかったらしく、明るく輝きながら飛ぶ人工衛星を教えたところ、長期間のキャンプでいささか退屈していた彼等は、その夜から人工衛星が現われるのを待つようになった。そうした頃、夜7時頃から11時頃までに、軌道を異にする人工衛星を3度みかけたことがあったが、この時の人夫達の質問は、興味深く、いまだに忘れられない。

最初の人工衛星を見た時

「あれはどこ国のですか？」

「アメリカのかもしれないね」

2度目には

「これもアメリカのですか？」

「ソ連のかもしれないよ」

そして3度目

「これは日本のですか？」

「アメリカかソ連のだろう」

「いや、これは日本のだ、絶対に日本のですよ」

他愛もない会話のようではあるが、3度目の人工衛星を見た時の問答の中に、私は私なりに、彼等の敵視するものに対する隠しがたい恨みの言葉と、いろいろの意味で彼等を毒したことのない日本に対する親愛の情のあらわれとを感じとった。こうしたことは、もちろん人工衛星に限らない。いつだったか、スライマン(第140図)というベドウィン出身の人夫が、「日本はアメリカやソ連と戦争して負けたでしょう」と質問したことがあった。

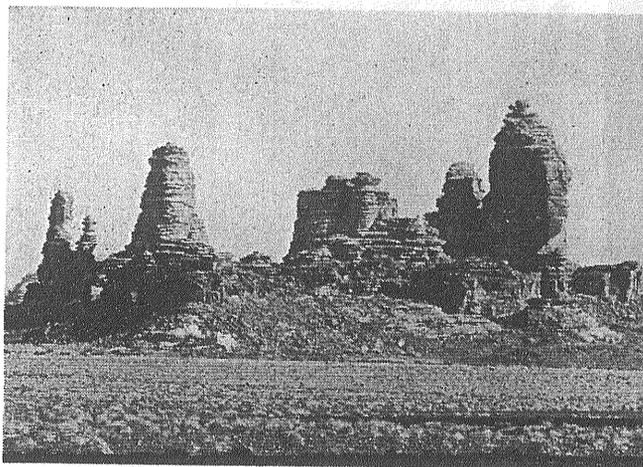
「そうだよ、飛行機や軍艦を動かす油がなかったから負けたんだよ」という答えに、この男は、真剣なまなざしで、「アラビアの油を全部やるから、もう一度アメリカやソ連と戦争して、勝ってくれ」と、いったものだ。

日頃彼等と生活を共にしていると、この2つの問答での彼等の態度は、受け容れ難い大国に対する、反抗心と憎しみの表われ以外の何ものでもないことを痛感する。

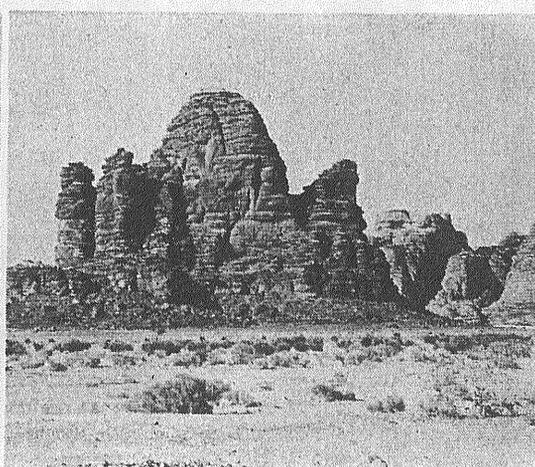
「油があっても戦争をしてはいけない」と訓したとしても、彼等の中には、それを素直に聞入れようとしないものが少なからずいる。そうした彼等の気持は、世の多くの人々には、理解しがたいものかもしれない。

かつて彼等の祖先は、ヨーロッパから西アジアにいたる広大な領土を有したサラセン帝国の支配者として、栄光の座に君臨し、権勢を恣にした。しかし権勢久しからず、その座を追われて以来、9世紀の星霜は流れた。

そしてこの間、緑なきこの大地の奥深く、打ちひしがれて懊悩呻吟する彼等を鞭打つかのように、列強の経済侵攻とサラセン帝国に代って権勢の座に着いた強国の領土的野心の手は、容赦なく、文化果つる広野に悲惨な姿で



第141図a カンブリア紀の Siq Sandstone の風蝕4態、ほぼ水平の縞模様は層理面を示す



第141図b 風蝕模様

辛うじて生きるこの砂漠の民に迫った。

支配者の座を一度転落した彼等は 再び砂漠に身を秘めて以来 他国者に対する警戒心を異常なまでに身につける一方 他国者を羨望の目で見ることを知らず知らずのうちに 習慣づけられていった。

時は流れ 莫大な富を手中に収めた砂漠の民は 汲めども尽きぬその富を足場にして それまでに培かれた卑屈なまでの羨望とジェラシーとの棒を一気に抜けて 再び中東地域に一躍して台頭すると共に 世界経済の一つの鍵を握る強国を築き上げた。

ここに至って 切なく生きた者の胸に長年にわたって秘められてきた羨望とジェラシーは 虐げられた者への怒と恨みと反抗心とに当然変った。 無学文盲の人夫達の脳裏に潜むそうしたものが 卒直に表現される場合 先に述べた対話の中での彼等の言葉になるように思えてならない。

8時半 人夫達は 夜空を焦がす焚火の傍で トランプや世間話に興じている。 突然 風に乗ってエンジンの響き聞こえ 3台の車が西の方から突走ってきた。 1台はダエツラッラ車で 他の2台は Al Aqabah から Tabuk へ行く車だ。 この車の帰着を待ちわびていた人夫達は 一斉に立上って車に駆け寄り 彼等の無事を喜こんだ。



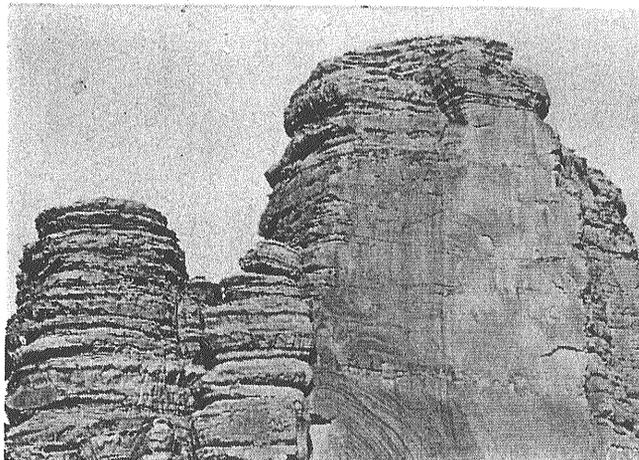
第142図 Tabuk 西方の砂漠で立往生した調査用ジープ
ナンバープレートの文字は 上が敏物資源局
左下がジエッダ 右下が245で黒地にオレンジ色で書いてある

より近い故か 風と共に きびしい寒さが襲ってきた。赤々と燃える焚火の傍にベッドを寄せ 4枚の毛布をすっぽりとかぶってねむりについた。 吹き抜ける風は岩を鳴らし 砂粒は車やベッドの金具を叩き 身に纏う毛布さえ音を立てはじめた。 きびしい最果ての地の夜だ。

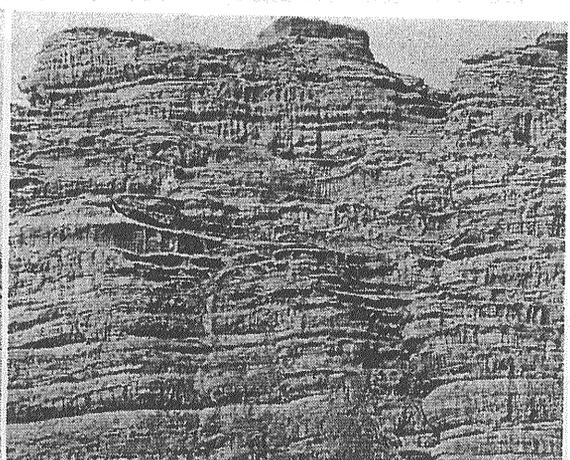
午前6時30分 相変わらず風が強く ベッドから抜け出した途端に 寒さが身体を突抜ける。 水は手を切るような冷たさで 顔を洗うのさえためられる。 7時10分に焚火を囲んで朝食をとり 7時45分には出発した。

Tabuk 風景

野営地からおよそ50kmの地点で風景はがらりと変わり これまで続いた先カンブリア紀の花崗岩や変成岩類の上にカンブリア紀の Siq sandstone と呼ばれる明るいオレンジ色の砂岩がほぼ水平にのって 一きわ美しい景観を呈している。 これから100km ばかりの間はこの砂岩のすばらしい風蝕地形と砂の海原の連続である。(第141図)



第141図c 削られたように見える部分は割れ目



第141図d 風蝕部にみられる不均質性は岩質の差異を示す

打続くこのすばらしい景観のほぼ中央部を走っている折 大型トラックが故障してしまった。風は益々強くなり 砂嵐の様相を呈してきたため 全車を1ヵ所に集めて 修理が終るのを待つ他はない。外へ出ても 砂に打たれる頬が痛くて のんびりと景色を楽しむことも出来ない。まったく厄介なことになったものだ。

修理が終り 各車がガソリンを補給して 12時に出発した。昼食は抜きだ。

これから先 Tabuk の近くまでは 砂砂漠を走ることが多いので 車のスピードはどうしても落ちる。もう20年近くも運転手稼業をしている割には コースの選定をはじめヘマをやることの多い私達が乗っているジープの運転手は 私達の忠告に逆らっているうちに とうとう 車を軟かい砂の中に突込んでしまった(第142図)。こうなると あがけがあがく程車はもぐるだけだ。車から降りて 砂をはねのけ 皆で押出す以外に方法はない。ちょっとした油断が得てしてこういう事態を惹起するので こうしたことに費やす時間は案外馬鹿にならない。

Tabuk までおよそ30分位の位置にある小高い丘にさしかかった時 完全な砂嵐になった。砂を含んだ強風は雨さえ混え 視界距離はわずか2~3mだ。ここから Tabuk までは 道が良いので 一気に走り抜けられるのだが 今日最後の行程を全員揃って無事に終るために 全車寄り添うようにして集結した。Tabuk の町を目前にして 人夫達の気持は多少冷静さを失っているが この砂嵐では いくら身勝手な行動をしようとしても それは不可能だ。ドアを閉めきっていてもどこからともなく砂が入りこんでくる車の中に閉じこもって 砂嵐が通り過ぎるのをじっと待つ他に方法はない。

30分ばかり過ぎて 砂嵐は弱まり 視界がかなり開けたとたん 全車一斉に出発した。久しぶりに見る町

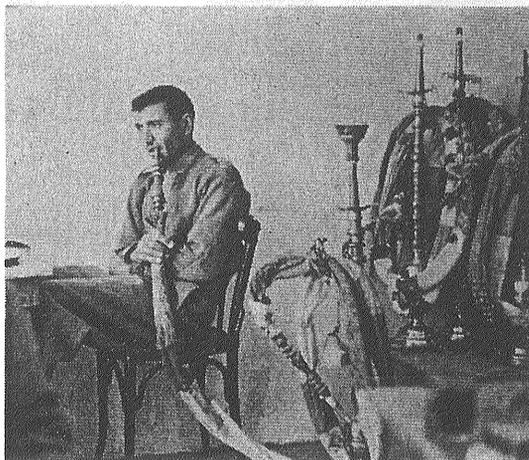
を目ざして どの車も まるで狂ったように がむしゃらに走りつづけた。無理もない。

午後3時15分 無事に Tabuk に到着した。この町の西側にある空港近くの広場には Makkah や Al Madinah への巡礼客を 中東諸国から運んできたバスやトラックが群をなし その周辺には無数の巡礼者が それぞれのグループ毎に 炊事の準備をしたり雑談に興じている。

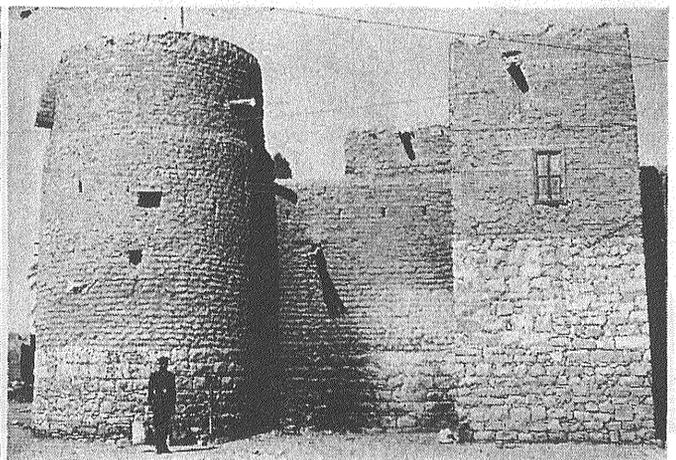
以前はこうした風景は地方では余りみられなかったのだが 毎年アラブ月の12月に行なわれる巡礼の折 諸外国から数10万人の人が一時に入国するので 交通の中心となっている Jeddah などではたいへんに混雑し これらの人達を手際よくさばくことがむずかしいので政府がそれぞれの入国経路に応じて 行動を規制するように決めたから こういう風景が各地でみられるようになったのだろう。Tabuk の商人にとっては福の神の出現と同じだ。これもアラーのおかげか。Tabuk の人口はおよそ2万人といわれる。サウジアラビア北部最大の軍事基地だけに軍人が多い。道傍の茶店に入ってみると 若い兵隊が のんびりと 水煙草をふかしていた(第143図)。

「ダヘン・マア・アンダック・ショゴル(今 仕事はないの?)」
 「ラア・マーフィ・アシヤラツブ・ドハーン・パス(いや ない。煙草を吸うだけさ)」
 まったくのんびりしたものだ。

この町には男子の小・中学校が4校 女子の小・中学校が2校 男子の高等学校が1校あり 人口の割りは教育施設もまあまあ整ってはいるが 6才で小学校に入学し 小学校6年・中学校3年の教育を受けるわけだが



第143図 Tabuk の茶店で水煙草をふかす兵隊



第144図 Tabuk の町に残る古い砦と番兵 この砦は下の方が石灰岩 上の方は乾燥レンガを積み重ねて造ってある上部にみられる細長い穴は銃眼

子供の就学率と卒業率は一体どの位だろうか。

町の中心になっている商店街を西へ行くと やや小高くなった所に トルコ時代の砦が建っている(第144図)。この砦は余程由緒があるのか その正面には ハンサムで 体格の良い若い兵隊が正装で番をしている。

Makkah・Al Madinah への巡礼を間近かに控えているせいだろう 町は中々賑やかだ。私達が泊るこの町では唯一の宿である Tabuk Hotel は2カ月前に出来たばかりだし 商店街にみられる物資も豊富だ。小ざっぱりした店には日本製のトランジスターラジオ・布類・スポンジローリ・文具具・腕時計に加えて石油ストーブさえ並んでいる。薪よりも灯油の方がはるかに安いだけに これからは 寒さのきびしい高原地帯の一般家庭やベドウィンの間に 石油ストーブが次第に重宝がられるようになっていくかもしれない。

3月21日 海拔およそ1000mの高原の町の早朝 窓からさしこむ朝のやわらかな光で目をさました。うるさい蠅も やはりこの光でねむりからさめたのか 早々と活動を始めた。どこかで鶏がかん高い声で鳴いている。日本の鶏はコケコッコと鳴くのだそうだが アラビアの鶏はキキキキキキと鳴くか または クククウーと鳴くらしい。もちろん アラビアの鶏が 余りの暑さに耐えかねてキキキキ鳴くわけではないし また 食物不足を愚知っているわけでもない。答は実に簡単でアラビア語にはOの発音がないからだ。

7時すぎに 下の茶店で パンと目玉焼きの朝食をとる。この店の主人 Mohmud Karim は41才で 21才の時にトルキスタンからこの国に移住し Makkah と Al Madinah を経て 3年前にこの店を開いたそうだ。中々の好人物で コカコーラを無料でサービスしてくれた。小学校5年生の彼の息子 Amin Bakhari も 父



第145図 Tabuk の茶店の主人と息子

親に似て おとなしく しかも 利発だ(第145図)

8時にホテルの支払を済ませた。お茶一杯サービスするわけではなし 唯泊るだけの値段が960円。蚊と蠅がわがもの顔で飛び廻っている部屋で ブリキ張りの組立てベッドで寝かされた割には高い。

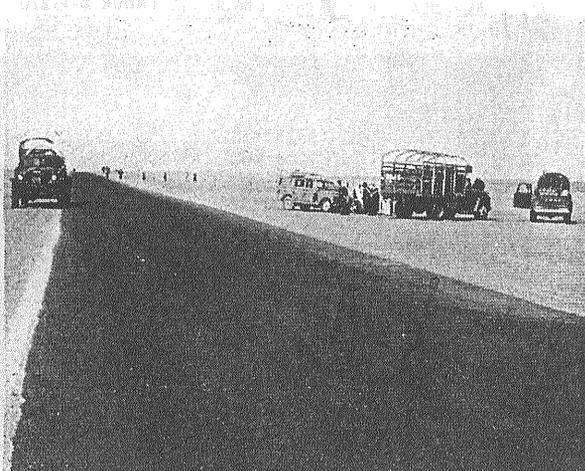
人夫達は 宿泊料を知って 自分達が支払うわけでもないのに 高すぎるとブブブウ文句をいっていたが 巡礼客が殺到する時期とあっては この値段も止むを得ない。

ユーゴスラビアの巡礼

9時6分 全車一齐に 町角のガソリンスタンドを出発した。自動車は整備工場ですでに点検済みだし ガソリンはたっぷり入っているし 完全な補装道路を Al Madinah へ向かって 走るだけなので気が楽だ。しかし安易な気持ちでいられる時には 得てして 突発事故が起こるものらしい。私達が乗っていたジープは Tabuk を出発した直後から 右手に Al Madinah とヨルダンの首都 Amman とを結ぶ Hijaz 鉄道の跡を見ながら ずばらしい道路を時速90km で走っていた。眠気を誘うこのドライブが始まってから35分の後 突然 私達が乗っている新しいジープの左前車輪がはずれ 車輪だけが道路上を一直線にひた走り 自動車は それから30m ばかり走った後に 大きく左へ旋回して 砂漠へ突込んでしまった。道路と砂漠とがまったく同じ高さだったから命拾いしたものの もしもこの両者の間に高低差があったら即死したかもしれない。

中型トラックは先へ突走った車輪を拾いに行き 他の車に乗った連中はボルトなどを探しに戻った(第146図)。

小さな部品だから 砂漠の中にも跳ね飛ばされていれば とても見つからないだろうと半ば諦めかげんで連



第146図 Tabuk 南方で事故を起こした調査用ジープと部品を探す人夫達(後方の人影)

中の帰りを待っていたが、ものの10分も過ぎた頃には連中はその部品を一つ残さず集めて帰って来た。彼らの視力は非凡だ。砂漠に突込んだ車を見て急停車し、私達の所へ駆け寄った人夫達は私達がまったく無傷なのを見た途端に「アラーのおかげだ」と私達に告げたがそのタイミングの良さにはシャッポをぬいだ。

車の修理を終り、10時に出発して間もなく正面衝突して大破したトラックと高級乗用車が目に入った。自動車をはとんどみかけないこんな立派な道路で何故にこんな大事故が起こるのかまったく不思議だ。大方乗用車の運転手が居眠り運転をしていたのだろう。

右手に雄大なそして美しい砂丘が見えてきた。北西サウジアラビアではこれだけの砂丘にはお目にかかることは珍しい。細かい砂が集まった黄色い丘を造っているにすぎないのに、いつまで見てもあきない(第147図)。

砂丘とは実に不思議なものだ。私達の目には美しく神秘的なものには違いないが、こうした砂丘がこの国の発展をどれだけ阻害しているのか測り知れない。

正午近く Al Qaliba の部落で、正服の警官に停車を命じられた。15戸ばかりの民家が集まっている何の変哲もない小さな部落だが、ここには北から南へ旅行する人や車を検閲する事務所がある。型通りにパスポートを提出し、Wadi Sawawin の鉄鉱床の調査を終って Jeddah へ帰る鉱物資源局の調査隊であることを告げて通過した。

果てしない砂漠の真只中を高速で走る時は対象物がないのでスピード感がにぶり、変わり映えのしない風景の連続なので、まったく退屈である。巡礼客を乗せたバスやトラックを見かけた時だけ若干の興味が湧くだけだ。腹の虫がわめく直前の1時30分に Tabuk から270



第147図 Tabuk 南方の砂丘 このような砂丘の多くは丸味をもった砂楯のように小さな砂粒の集まりでできている

km 南の Tayma のオアシスに着いた(第148図) 清潔さなどみじんもない茶店でしつこい蠅の群と喧嘩しながら昼食を済ませた後一休みしてこのオアシスを出発し An Nafud の大砂漠の西端(第149図)をかすめて走り続け、約160 km の地点でコンクリート造りの空家を見つけた。

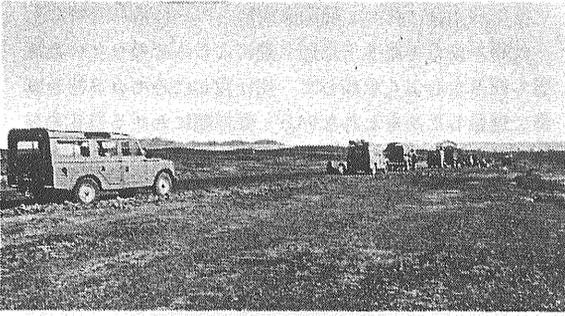
皆が集ってこの家で泊るか前進するかを相談しはじめたが、家の中はものすごく汚ない上に悪臭に満ち、とても寝られる状態ではないので、前進することに決めた。

午後5時、暮れなずむ砂漠を鳴らす風が冷たくなってきた。泊ることを予定して一旦停車し、再び先へ進むということは、疲れもあって、気分的にも良いものではないが、この家で泊ることは、砂漠を褥にごろ寝することをいとわない私達にとっても人夫達にとってもとても出来ない。車に戻り、ここから90km 南の Khaybar まで走るようになったが、これから後約1時間の間、車内での話も絶えた。

6時20分に Khaybar に着いた(第150図)。ここは Al Madinah へ185kmの地点にあるオアシスの村だ。村の入口には、道路を挟んで、広いナツメヤシ林があり



第148図 Tayma の部落の一部 粗末な家に似つかわしくない高級乗用車が目を引く。自動車が停っている所は茶店



第149図 ネフユード砂漠(前方の白い砂漠)を目前に小休止する調査隊

滾滾と湧く泉には、水汲みの女性の姿もみられる。経済的にはかなりゆとりのありそうな感じだが、人家は少なく、ひっそりとした落着きのある村だ。An Nafudの大砂漠に輝やく白熱の砂もみえず、道路の両側には真黒の玄武岩塊が積重なっているので野宿することはむずかしい。今夜は160円をふんばつて、茶店の椅子で寝るより仕方がない。

茶店に到着して間もなく、コックは、茶店の炊事場を借りて、夕食の準備にかかった。今夜の御馳走は、主食が白飯で副食は羊肉と野菜の煮込だ。長椅子に腰掛けての夕食が始まった。腹が空っぽになっているので中々うまい。ところが、私達の食事が始まって間もなく、ユーゴスラビアからの巡礼客が、私達の所へ来て食物をのぞきはじめた。日本人の食事の場を見ることがほとんどないと思われる彼等のそうした興味心を理解出来ないではないが、肉と野菜のゴツ煮など見た目には決してきれいではないし、気にすまいと思っても、やはり多少は気になる。しかし今は、空腹を満たし、栄養をとることが第一だ。「美味しいか?」という彼等の質問に「アイワ・クワイエス・ジエッダン」(はい、すごく

美味しいですよ)」と答えて、食べることに精を出すことにした。この茶店での一夜は、夜通し、巡礼客が立寄って騒ぐので、快適ではなかった。しかし、聖地を目前とした彼等の喜びを思えば、これもいたしかたない。

6時過ぎに寝袋から出て、洗顔した後、ユーゴスラビアから来ているバスがどういう経路を何日かかって来たかを知りたくて、彼等の1人に聞いてみることにした。

一行の中では割合に若いその男は母国語以外の言葉を知らないらしく、はじめ英語で話しかけたが駄目。アラビア語で話しかけてもまったく駄目で完全にお手上げだ。さらばと、ボンジュール・ムッシュ・コマンタレヴ・グーテン・モルゲン・ヴィ・ゲート・エス・イーネン・ブオン・ジョルノ・コーメスタ、ブエノス・ディアス・コモ・エスタ・ウステ、と、フランス語・ドイツ語・イタリア語・スペイン語と並べてみたが、遂に通じなかった。もっとも後の4カ国語についての私の知識はお早う、こんにちは程度だから、もしもこの4カ国語の中のどれかを相手が十分にこなすことが出来たら、私の方がしょんぼりしたことだろう。唯残念なことは、ユーゴスラビアで使われているセルビア語・クロアチア語・スロベニア語・マケドニア語の知識が私にはまったくなかったことである。何ともしっくりしない状態の2人に気がついたのか50才位の品の良い人が私達の所へ来て私にアラビア語で挨拶してくれたので、渡りに舟とばかりに、その男性と話ををはじめた。

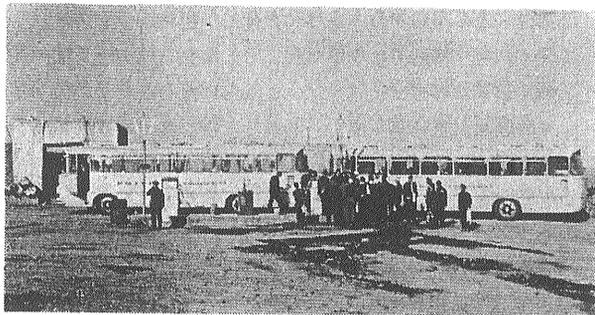
この人は、以前に、短期間ではあるがサウジアラビアで生活したことがあるらしく、アラビア語を少ししゃべる。私は早速、この旅行のことを聞いてみた。彼の話によれば、彼等を乗せて Beograd を出発したバス(第151図)は Sofia—Istanbul—Ankara—Damascus



第150図a Khaybar 風景



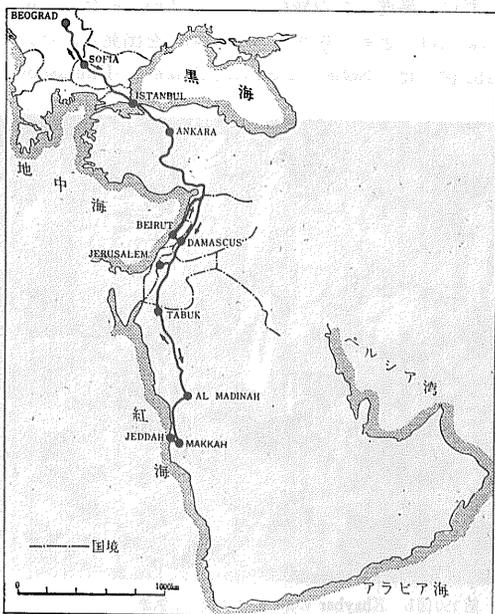
第150図b Khaybarの泉の近くで遊ぶ子供達



第151図 Khaybar で休息するユーゴスラビアからきた巡礼バスと客

—Tabuk—Al Madinah—Makkah—Jeddah—Al Madinah—Tabuk—Jerusalem—Beirut—Ankara—Sofia を經由して Beograd へ帰るといふことだ(第152図)。Beograd から Al Madinah までは2週間がかりだそうだが 一行の中には 70才以上の老令者が幾人もいた。彼等の体力もさることながら イスラム教徒としての信仰心の強さがその支えになっているのかもしれない。

私に旅行のことを話してくれた人が 話がしきり終わった後で「カメラを売ってくれ」と私に頼んだ。私はこれから後もそのカメラを仕事のために使わなければならないので その理由を説明して 彼の頼みを丁重に断った。そして念の為に「このカメラ(日本で12,600円)を幾らで買うつもりですか?」と聞いてみた所 「日本のカメラは素晴らしいから貴方の希望通りの価格で買う。日本では400リアル(32,000円)でしょう」という彼の返事だった。



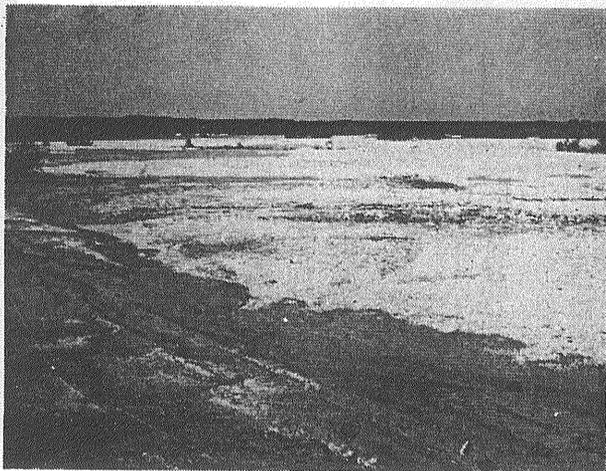
第152図 ユーゴスラビアからメッカへの巡礼経路

仕事が完全に終り 帰国直前にこの人に逢っていたら彼の頼みを心よく承諾して 使い古したそのカメラを無償で進呈したかもしれない。長期間にわたる巡礼の旅の記録を末長く残すことを念じて 私にカメラの譲渡を頼んだこの人が 再び巡礼者として聖地に詣でることが出来ないかもしれないと思うと まったく気の毒なことをしたものだし いささか後悔の念にかられる。

Badr への道

Khaybar を出発してからおよそ40km 走った頃 右の方に真白の平地が見えた。砂砂漠でもないこの付近にこれほど白い砂地があるわけではない。車から降りてそこへ行って見てまったく驚いた。その白い部分は塩だ(153図)。紅海沿岸地域では純白の塩をしばしばみかけたものだが 海拔1000m前後のこの高原で塩を見ようとは夢にも思わなかった。どうしてこのような現象が起こるのか知るよしもないが この塩は 厚さ20cm ばかりもあり 結構の量だ。しかし この塩を採取した跡はまったくみられなかった。広い範囲にみられるこの塩を地質・岩石学的に調べてみたら思いがけない答が得られるかもしれないが 今はそのゆとりはない。

ここから10km ばかり南へ行くと茶店が1軒ある小さな部落に着く。人家は少なく しかも Khaybar へ近いので 街道に面したこの茶店には客らしい者の姿も見えない。店の主人も小間使も手持無沙汰でのんびりしたものだが ここには私の興味心をそそるものがあつた茶店の裏の井戸には地表から8m位の所に水があり この水は ポンプアップされて 飲料水として利用されているが 例に洩れず この井戸には蓋がなく 砂もゴミも入り放第だ(第154図)。井戸の近くでは泥を原料とした乾燥煉瓦が作られている(第155図)。泥をこねて

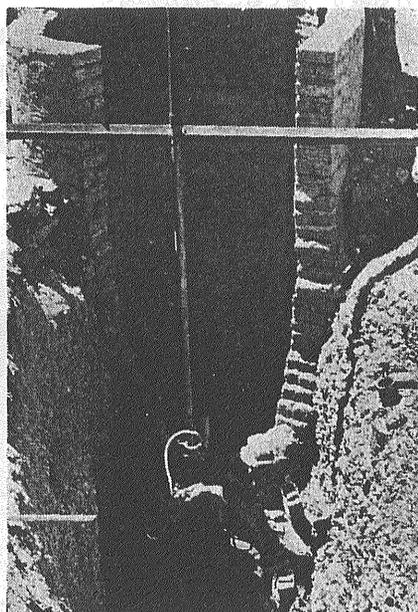


第153図 海拔1,000m前後の高原で見た塩 こんなに大量の塩がどうしてこんな所に堆積したのかわからない

枠に入れて整形したものを強烈な太陽の光で乾かしただけのものだが 出来上がったものは 思ったよりも堅く指先で崩すことは到底出来ない。高原地帯の田舎でみられる古い家はだいたいこの乾燥煉瓦で出来ているが 中々長持ちするようだ。茶店の軒先には面白い水入れがおいてある。ドラム缶の両端を厚さ10cmばかりの木枠で巻いて、ドラム缶の中の水の量に応じて、これを転がしながらの水を出すようにしたものだ(第154図)。

ドラム缶を貯水タンクとして利用することはごくありふれたことだが、こういう仕掛をしたものを見たのははじめてだ。一寸した工夫だが中々便利である。店の若い男に「アンダツク・モッホ・ケティール(貴方は利口だね)」と云ったら、「ショックラン(有難う)」と云って、にこにこしていた。便利なこの水入れは、案外この店の看板の一つかもしれない。

正午 Al Madinah を望む茶店に着き、自動車を1ヵ所に集結して(第158図)。この茶店で一休みすることにした。風通しのよいこの茶店は、墨を流したような玄武岩台地(第158図)を目前にした、中々良い場所にある。珍しくツバカスの多いこの店の主人のMohmedはまだ20才の若さだ(第159図)。ここから見る Al Madinah の市街は Jabal Okhod の山麓にひっそりと静まりその中心となっている白亜のモスク(回教寺院)のミナレット(尖塔)が、晴れ渡った紺碧の空に映えて、実に美しい(第160図)。人夫や運転手達は Al Madinah の聖地に詣で、そして一夜をそこで過ごす。



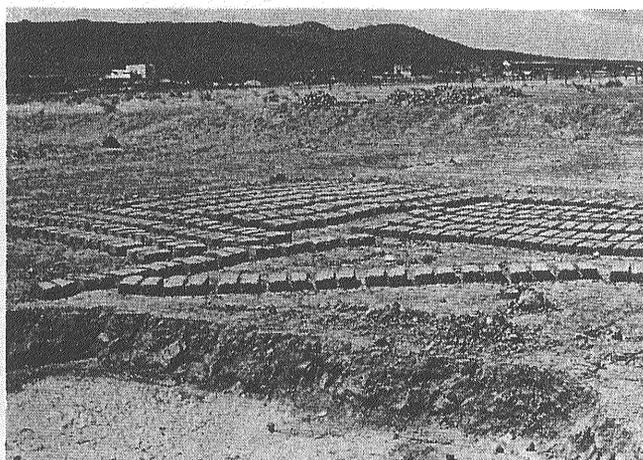
第154図 サルサラ部落の井戸 水はポンプアップされて飲料水として用いられているが井戸に蓋がないのでゴミは入り放題だ

とを望んではいろのだが、異教徒である私達がそこに立入ることが出来ないので、彼等もそれを断念した。

間もなく私達はこの茶店を後にし、建設途上の迂廻道路を通して、Jeddah へ通ずる補装道路へ出た。ここから Jeddah までは413.5kmの道程である。後続の車を待ち、一応全車集合した上で出発し、およそ30分走って Flaysh に到着した。

Madinah 道路に面するこの部落には割合に小さざっぱりした茶店が数軒ある。私達はその中で一番大きくしかも椅子の少ない店を選んで昼食をとることにした。いつもならば長椅子に腰を掛けて食事をするのだが、ここでは、土間に ナツメヤシの葉で編んだアンペラ様のものを敷き、あぐらをかいて、ビスケット・ウデ卵・魚の缶詰・紅茶の昼食をした。この昼食は強心臓の持主であることを自他共に許す通訳によって計画されたもので、敷物の借料はただ、店に支払ったのは紅茶代と卵代だけだ。店にとっては、広い場所を長々と占領された上に敷物を汚され、しかも大した銭を使ってくれない客だけに、良い迷惑だ。いささか気がとがめるが、俺の故じゃないよという顔付で、卵が小さいとか紅茶の砂糖が少ないとか、文句をいながら時間をつぶし、腹を満たすのも結構面白い。

午後3時にこの茶店を出発した。快適な補装道路は、険しい山の間をぬって、曲りくねりながら、かなり急な傾斜で西の方へ下ってゆく。ドライブの途中で、野たれ死にした羊の死骸に食らいつく秃鷹の群を見た。羽を拡げれば2m以上もある秃鷹が、大きな足で死骸を踏みつけ、鋭く太い嘴でその肉を食いちぎる光景は、特に鬼気迫るものがある。こうした惨酷な血なまぐさい出来事は、乾ききった不毛の砂漠ではごく当り前のものとし



第155図 サルサラ部落で造られているレンガ 泥を木枠に入れて整形し、天日で乾燥するだけだが、雨が降らない土地だけに結構長持ちする

て展開されるに違いないのだが なじみのうすい私達に肉をさかれる羊を哀れと思ひ秃鷹を憎しむ心を抱かせる。陽はすっかり西に傾むき 曲りくねった道路も直線的な水平道路に移り変わって これまでよりは風が幾分生あたたかくなってきた。そして間もなく Madinah 道路に面する部落の中でもっとも大きな Badr に到着した。ここから Jeddah までは 275km にすぎない。夜遅く到着するつもりならば帰れないことはないが Jeddah へ帰着後に行わなければならない荷物の収納作業を思うと たとえ帰り着けたとしてもたいへんなので 結局この夜はこの部落で泊ることになった。

調査旅行最後の夜 私達は 人夫達の労をねぎらって大きな羊を 1頭購入して彼等に贈った。このことを予想していたであろう彼等の喜びようは 明日は Jeddah へ帰れるということもあって たいへんなものだ。もちろん 今日中に Jeddah へ帰ることを主張していた連中も 羊を見たとたんに態度を豹変して 明日帰ることを主張しはじめた。まったく 偉そうにヒゲを生やしたいお父ツアンとも思えない彼等のそうした態度にはいささかあきれが 見えすいた余りの幼稚な態度を見ているとおかしさが先に立つ。ふさふさとした毛におおわれた大きな羊が キョトンとした顔付で 自動車の横に立っている。ナイフを磨き終った人夫が 白い歯を見せて笑いながら やって来た。右手にナイフを持った人夫が 素知らぬ顔で羊に近づき サーッと左手で羊の首を押えるのと同時に もう 1人の人夫が胴体を押えた。横倒しになった羊は 必死になって暴れるが こうなった以上 所詮 逃げきれぬものではない。ナイフがキラッと光り 羊の喉笛に食いこんだ。鮮血がほとぼしり 砂に吸いこまれてゆく。羊は うめく間もなく絶命した。血糊のついたナイフを手にした人夫の

笑顔には残忍さが不思議にみえない。

死に絶えてからおよそ 15分後には 羊は原形をまったくとどめていなかった。肉は分配され 私達の分け前は肉飯の材料となった。キャンプ最後の夕食とあって コックが腕によりをかけたのだろう。今夜の肉飯は中々美味しい。はじめてこの国へ来た当時は自分の目の前で殺された羊の肉を食べることになり強い気遣れを感じたものだが 長い間の生活の中で数えきれない程そうしたことを経験しているうちに 羊を哀れむ気持は消え去った。惨酷非情のようだが 食物の乏しいこの荒々しい砂漠で五体満足に生き抜いてゆくためには 徒らに家畜を憐れんでも居られない。しかし このきびしい砂漠での生活を一旦離れ 己が手がけた家畜の肉を常食としないでも済む一般社会で生活を営むようになれば はじめて経験した時のように たとえ一時とはいえ 自分を慰めてくれた可愛い動物の頭を 満面に笑を湛えながら 切り割り そしてその肉を口にすることを厭うようになるだろう。しかしそれはあくまでもこの砂漠を遠く離れて生活を営むことの出来る人たちだけに共通のことだ。

悲しいことではあるが 生れおちて以来わが子と同様に愛しみ育てた家畜の喉を割き その肉をむさぼり食わなければならない生活は 砂漠に生れ 砂漠に育ち してそこで天命を全うすべき宿命を負う人々にとっては 避けることの出来ないものだ。そしてそれは 砂漠が生きつづける限り 果てることはなからう。

夜は更けて人夫達の声も絶えた。茶店の裏手にある悪臭のたちこめる小屋に並べられたベッドを離れ 一と表へ抜け出してみると 細々と燃える焚火の囲りに 砂の上にゴロ寝をしている人夫達の姿があった。余程



第 156 図 ドラム缶と自動車のタイヤを利用した水入れと茶店のウエイター 左の方に見えるランプはホンコン製



第 157 図 Al Madinah 近郊で休息する調査用車

疲れているのだろう。風が音を立てているのに 寝返りをうつ者もない。太い薪を2本くべて小屋へ戻った。

Jeddah へ

旅行最後の朝 午前6時に起き 7時に朝食を終った。人夫たちは朝食抜きだ。7時17分に茶店を一斉に出発して走りつづけ 1時間半の後に Labigh に到着した。いつものくせで 調査地へ向かう時にはのんびり走るのでに帰りは飛ばせるだけ飛ばすので実に早い。人夫達はここの茶店で朝食することになった。「連中のことからどうせ2時間位は動かないだろう」と思っていたところ 35分後には「ヤンラ・エムシィ(さあ 行こう)」といって出発準備にかかった。

Labigh から Jeddah までは160kmの距離だ。途中で1度は休憩するのが常だが 遅くともホテルの昼食時間には間に合うだろう。ところが 一刻も早く Jeddah へ帰り着きたいと思っている人夫たちは途中で休む気配を一向に見せない。運転手はアクルセを一杯に踏みっぱなしで 走りに走り Tuwwal を過ぎ 検門所でも停車せず 11時には Jeddah の市街に入った。まったく憎い連中だ。

長い旅を終えて久しぶりに帰り着いたこの日 Jeddah 市内の所々には 他国からはるばるやってきた巡礼者が Makkah 詣でを目前にして テント生活をしていた(第161図)。外国からの巡礼者については それぞれの入国経路の要所で 移動を規制してはいるものの Makkah に近い Jeddah 市内にはやはり溢れんばかりの巡礼者が右往左往している。年に一度の巡礼 そして この時期は年に一度諸物価が上がる時でもある。しかし物価は天井知らずに上り続けるわけではなく 巡礼者が帰国し

て市内が元の状態に戻ると 再び元通りに下るわけだ 長い間家族と離れて調査業務に従事していた人夫も運転手も 無事に それぞれの家へ散って行った。聖地へ詣でる日とその後の一週間にわたるお祭りを控えたこの夜 彼等は 久しぶりに逢えた家族と膝を交えて 留守中の出来事や調査旅行の苦労話に夜の更けるのを忘れることだろう。

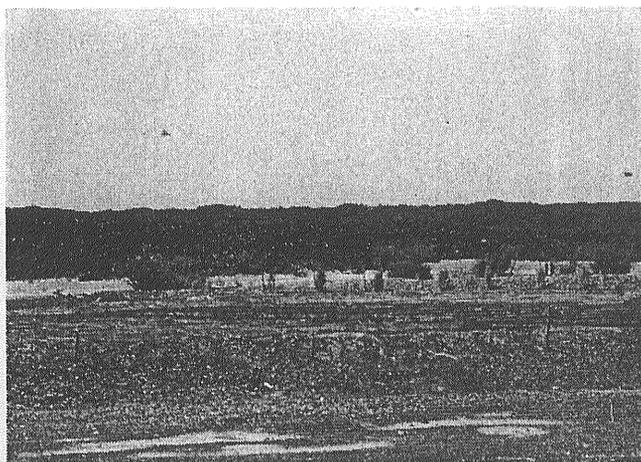
彼等の喜びを念じながら 私達も 久しぶりに 住みなれたホテルへ戻った。長い間人気のなかったホテルの部屋は味気なく 無事に帰り着いた安心感もあって一度腰を下ろすと立上るのさえ億くうになる。しかしまともな部屋で寝起きし まともな食生活が出来ることを感謝せねばなるまい。苦労の多かった長い旅路は終わった。この旅で汗とほごりにまみれた身体から垢がすっかりとれるまでには1週間位はかかることだろう。

むすび

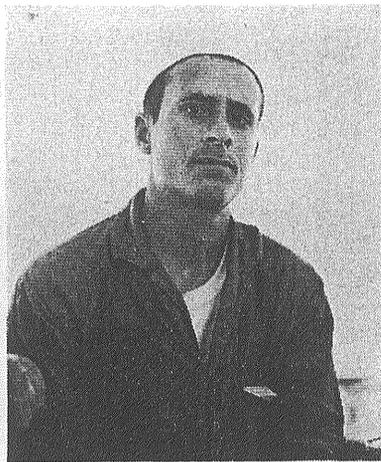
これまで13回にわたって 思いつくままに サウジアラビア王国の現状・地質・鉱床のあらまし 調査旅行のようすなどを書き連ねてきた。執筆途中で再度この国での勤務を余儀なくされたことやその他諸般の事情で 内容の乏しいかつ断片的なものになってしまったが これまでの拙い文章の中に 多少でも この国の姿を見出していたら幸である。

健康管理の立場から この国での勤務は2年間が限度であると云われており 長期間にわたる砂漠での調査業務とキャンプの乏しい食生活を余儀なくされる技術者が長年にわたってこの国での勤務に誠実に励むことは 彼等自身がいかにか健康管理に慎重を期したとしても 現状では決して好ましいことではないように思える。

しかし こうしたことを改善することは 技術援助の



第158図 Al Madinah 付近の玄武岩台地とその上を飛ぶ鉱物資源局の調査用ヘリコプター



第159図 Al Madinah 入口近くの茶店の主人モハメッド 年令を聞いたら20歳と答えた

あり方によっては 多分に可能であろう。たとえば被援助国政府と援助国政府とが契約し 両者間の同意で決定された予算を 援助国が自主性をもって技術援助目的のために使う方法をとればよいわけである。一方援助国政府が相手国の要請を受入れたとしても すべての契約が被援助国政府と派遣技術者個人の間で締結された場合には こうした面での改善は中々困難であり 勤勉実直な日本人を以てしても 目的を完遂する上に支障を来さないとは限らない。

アメリカ合衆国から派遣されている調査団やフランスから派遣されている調査団は前者に属し 日本の調査団は後者に属する。従って 前2者と後者との間には いろいろの面で 著しい相違がある。たとえば フランスの調査団の場合 事務所・車輛その他業務に必要な設備・物品の購入および現地人の雇傭などは 政府が契約した予算の枠内で 自主的に行なえるし 長期にわたって調査業務に従事する技術者のために 砂漠にもっとも適した作業靴を支給し テント内を完全にエアコンディショニングして生活に潤を与え また 数少ない就学児童のためには本国から教師が派遣されて子供たちの教育に支障を来さないようにしている。このような調査団を構成する技術者とその家族が 可能な限りの充実した環境の中で 不安なく業務に励み生活を営むことが出来るのは その国が いわゆる開発途上国に対する技術援助を政策上重要視し その本質を見極めた上で 相手国と契約し そのために十分に活動出来る組織を主要機関として設置しているからであろう。単的にいえば こうした技術援助の要請に対して 国が 即刻 実状判断を行ない それに応じることのできる組織と陣容とを常備しておく必要があるということになるのか。

フランス政府がこの国へ調査団を派遣したのは1965年春であるが この調査団の主要メンバー3名は 前もって数ヵ月間も Jeddah に滞在して 調査団のための下準備をしていた。こうしたことは 多勢の技術者を派遣する場合には必要なことには違いないが 実質的に個人契約者の集団である調査団の場合には 団員の総意によって費用を捻出でもしいかぎり 実現しそうにない。

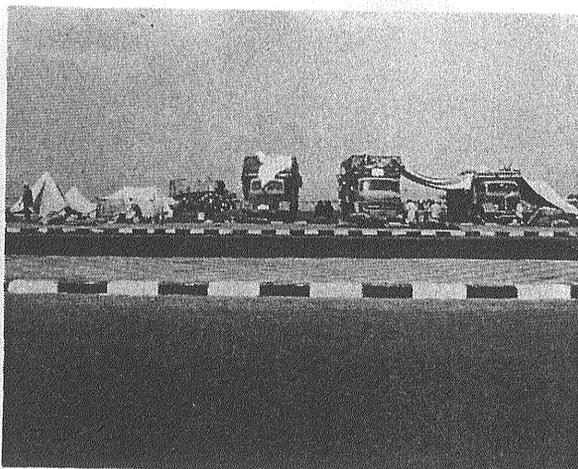
絶えることなく無気味な鳴動をつづける中東地域にあって サウジアラビア王国の一挙手一投足は いろいろの面で世界の注目的であり とくにこの国と石油資源について直接の利害関係をもつ国に対して一喜一憂を与えずにはおかない。第2次中東戦争終結後すでに2年を経た現在 世の多くの人々の願望をよそに アラブ諸国とイスラエルとの間にはなお一触即発の危機が厳然として存在し 国境地帯においても占領地区内においても 血腥い争がいつ果てるともなく続発している。平和共存のために お互が 過去の怨讎を忘れ 必要以上のメンツと自己主張をいさぎよく捨てて話し合いの場に臨まないかぎり 中東に真の平和は訪ずればしない。

自他共に認める大国の力に頼り 戦に破れば さらに軍備を強化して 勝者を斃す日を夢見て狂奔し 戦に勝てばさらに堅固な砦を構築して反攻に備えることに没頭するという敗者と勝者との姿勢がある限り 白熱の砂漠に真紅の血潮にまみれて斃れる若者が後を絶たないだろう。「目には目」「牙には牙」という言葉で表現されるアラブの先天的斗争心が若者たちの血をたぎらせることがわからぬではないが 彼等のすべてが 共通の権利と義務をもって等しく生きる権利をもつ世人の真の平和な営みのために自ら戦の場に馳せ参ずるのだろうか？

広大な砂漠の中に忽然と現われた富める国サウジアラビア王国。その富の源泉を外国技術に依存して汲まな



第160図 Jabal Okhod のふもとに広がる Al Madinah 市街(白い建物のある付近がほぼ中心)



第161図 Jeddah の外務省前の広場で野営する巡礼者とその車 このトラックの荷台は2段になっていて 多くは下段に女性 上段に男性が乗っている

ければならない現在のサウジアラビア王国ではあるが
この国の若者たちは 明君の誉れ高いファイサル国王の
方針と相俟って あらゆる分野で 近代科学と技術の習
得に懸命の努力を続けている。 やがて彼等は 地下資
源開発の立派な技術者として あるいは科学者として
また政治・経済部門の専門家として 外国技術者を必要
としない近代的国家建設の主要な柱となることだろう。

独立独歩 この国が己の力で発展の道を力強く歩き出
す時 この国と経済的関連をもついわゆる先進諸国がこ
の国に対してどのような姿勢をとるか これはきわめて
興味深いことだ。 「ローマは一日にして成らず」とい
う諺があるが 商才に長けていることでは世界に名だた
る“アラブの商人”のこの国が真の独立国家として自立
し 世界の政治・経済界に高い地位を占めるまでにはか
なり長い年月を要するだろう。 サウジアラビア王国の
誕生以来わずか36年余を経た現在 荒蕪たる大地をわが
もの顔で跋扈して村や旅人を襲い 力と刃で快樂と富の
蓄積に狂奔した者共の姿はなく 近代国家への変貌を目
ざして積極的努力が続けられている。 しかし その努
力はいつどのように開花するだろうか。

雪割草が芽生え やがて 野も山も若く美しい緑に
包まれ 色を添える数々の花にたわむれる蝶の乱舞が目
を奪う春 人々の顔はほころび 着る物の色も模様も華
やかさを取戻して足取りは軽くなってゆく。 しとしと
と降る雨の時期を過ぎた夏 強烈な光の下で水にたわむ
れ 山の頂をみざして汗し 自然を満喫する若者達の姿
が消えれば 紺碧の空の下には目を奪う紅葉とその間を
ぬる清冽な水の流れに誘われて遊客が足を運ぶ。

柿の実が熟れ 霜柱が足を鳴らす秋の日を過ぎて 木
枯しが吹き抜け 木の葉も草も枯れ果てれば 深い雪に
閉された冬が再び訪ずれてくる。 このような四季に恵
まれた国では 人々の心も行動もそして衣も 時候に応
じて めまぐるしく変わり 人々は自己の生活の向上と
それにうるおいをもたせるために 知らず知らずの中に
相互に競う生活に明け暮れる。 そしてその競争は 止
まる所を知らず 文明の発展と共により激しさを加えて
ゆく。 国の繁栄も文化の発展も こうした氣候風土に
基づいて起こる諸々の競争に根ざし そして それに刺
激されてより次元の高いものへ移り変わってゆくことが
案外多いのではなかろうか。 きびしい寒さだけの中に
明け暮れ あるいは 耐え難い程の暑さだけの世界に乏
しい水を頼りに息づく国には もちろん その国独自の
文化はある。 しかし そうした国に四季に恵まれた国
に芽生えそして育った文化をはるかに凌駕する文化が発

達した例を私は知らない。 アラブの勇気と顕知は 確
かに絢爛たるサラセン文化を築きあげはしたが 母国を
その恩恵に浴させることは出来なかった。

こうした見方にもとづいてこの国の将来を想う時 そ
の輝やかなしい地位を得るまでには 戦乱の世を治めて独
立国家を創設するまでの長い才月にわたった余儀なくさ
れた苦悩に勝るとも劣らぬ苦難に耐えながら歩を進めな
ければならないことを痛感する。 名君の誉高いファイ
サル王が王位を受け継いで5年を経た現在 中東戦争・
イエメン戦争・アデン紛争・アラブ諸国間の不和を通
じて 王も国民もサウジアラビア王国の使命の重大さを
より一層痛感し そして 今後進むべき大路線を敷く抛
り処を見出したことだろう。 そしてこの国は 石油資
源およびこれ以外の地下資源の開発・各種の産開業発と
教育・福利向上等を中心にして より近代化への道を力
強く進むことだろう。

世界の政治・経済界に強い影響力をもつ真の独立国家
としての地位を占めるまでに 関連諸国が この国に対
して どのような政策をどのように進めてゆくかはきわ
めて興味のある問題の一つである。 少なくとも 石油
利権の契約期限の到来を控えて 諸国はより高度な秘策
をより強力に押し進めてゆくにちがいない。 そしてそ
の動きはすでに始められていると思われる。

日本の工業界に大きな影響力をもつサウジアラビア王
国が 私達にとって もっとよく知られてよい国の一つ
であることは間違いない。 そしてこの国をより広くか
つより深く知ろうとする時 私達はその宗教的背景を無
視することは出来ない。 紀元前およそ560年 インド
のカピラ城の太子として生まれたシヤカ族のゴータマ・
シツダルタが 人生問題についての苦悩の末に 菩提樹
の下で真理を悟り シヤカ族の聖者となって以来広が
った仏教ではあるが 今はその発生の地には仏教徒はむし
ろ少ない。 こうしたことは仏教に限らず 世界第一の
宗教として知られているキリスト教にもみられる。 19
64年春 キリスト生誕の地ベツレヘムを訪づれた私に
案内をしてくれた若者は住民のおよそ80%がイスラム教
徒であると語ったが 私は この現実を見 肌で感じて
とまどいを覚えた。 現在のサウジアラビア王国に発生
したイスラム教は およそ3億の信徒を有する世界三大
宗教の一つとなったが その発生の地で生活を営む人々
のすべてが その教ときびしい戒律の下で たくましく
生き続けている。 こうした大きな相違が何故にあるの
か。 その秘められたものを抜きにしてこの国を見 そ
して語るかぎり この国の真実の姿を知ることはむずか
しからう。

(筆者は飯塚部)